

1960年代後半に米国から持ち込まれた「アイビーファッション」。40代半ばから60代前半の男性の多くは「VAN」のロゴにあこがれ、メンズショップの店員を手本に商品知識や着こなしを学んだ。その後、ファッションの多様化の波に押され消えたかのように見えたアイビー。だが、インターネットを通じて隠れたアイビー魂が息を吹き返し、「young-at-heart」な中年アイビーリーガースが街を闊歩(かっぱ)し始めた。

おそろいのブレザーに身を包む「アメリカン・トラッド・クラブ」のメンバー(東京都中央区)

＜アイビーを理解する用語集＞  
アイビーファッション 米国の伝統衣装デザイナー協会が1965年、ハーバードなど名門8大学のアイビーリーグ出身者が好むスーツを「アイビーリーグモデル」として発表した。ジャケットはシングル3つボタン上2つかけ、ナチュラールショルダー、ズボンには細身のパイプドステムといった特徴を持つ。当時の学生が着たカジュアルウエアも含めてアイビーファッションと呼ぶ。

ボタンダウンシャツ 歴代の米四大誌を顧客に持つブルックスフラグゼースが初めて商品化した。素材はオックスフォード地が代表的。洗いざらしでカジュアルに着るのよし、プレスしてレジメンタルストライプなどのネクタイを締めればビジネスで通用する。



# 我ら アイビーおやじ

「東京マラソン」が開催された2月18日の昼過ぎ。まだ近くを市民ランナーが走る東京・八重洲通り。そこに赤いブレザーに身を包んだ一団の姿があった。通りを行き交う人は一瞬、マラソン関係者かと思ったようだが、何かが違う。ボタンダウンシャツにレジメンタルストライプのネクタイ、足元はローファーやサドルシューズ。髪に白いものが目立つが、表情はみな若々しい。

彼らはいずれも5年ほど前まで見知らぬ同士。それが今では数十年來の友人のように付き合う。札幌、新潟、岡山、日立、東京、横浜、桑名と住まいも、仕事もバラバラ。しかし、みな中高校生時代におしゃれに目覚め、アイビーの「洗礼」を受けた世代。「アイビー」を共通語にネット上のホームページやブログを通じて知り合った仲間たちだ。

## 集まれば全員紺ブレ

交流のきっかけは「TRAD(トラッド)」こと植場(はせば)克己さん(50)が2000年1月に開設した「TRADのホームページ」。自慢のワードローブや、アイビーファッションのうんちくを披露する。開設当初は中高年が家庭でパソコンを本格的に使ったころ。「アイビー」「トラッド」といったキーワードを



## ネットで交流、クラブ結成

検索すると、植場さんのホームページにヒットし、掲示板で語り合う人の輪が広がっていった。

03年5月には直接顔を合わせるオフ会を初めて開催。テラー「ガール新調」を経営する松原功さん(49)らの地元新潟に、札幌市在住の中井尚史さん(50)、桑名市の植場さんらが集まった。「新潟駅で待ち合わせたら、申し合わせたかのように全員紺ブレ姿。ウソが多いネットの世界だけど、こいつらは本物。信じられる」と、一気に胸襟を開いた。

「旧知の間柄でなくても共通の趣味があり、仕事のつながりがないから余計に楽しい」と植場さんは言う。日常的に掲示板やブログでコメントし合うのは30人ほど。その一方で杯を重ね、青春時代の歌を楽しむオフ会を各地で開く。

「赤いちゃんちゃんこは着たくない。やっぱりオれたちは赤いブレザーだ。」「おらば〜不長鈴木」こと

鈴木仁志さん(57)と親友Kさんが、選物を前に購入資金を積み立て始めたことが、赤いブレザー集団誕生につながった。植場さんと鈴木さんからの交流は「アメリカン・トラッド・クラブ」の結成に発展。昨春秋にクラブのユニホームとして赤いブレザーをそろえることになった。

ブレザーはもちろん3つボタン段取り、センターファックドベントの「アメリカン・トラッド」型。「アイビーおじさん」こと、メンズショップ「ボタンダウンクラブ八重洲店」(東京・中央)を経営する倉橋武さん(63)が、VANや往年の人気ブランド「マクレス」を手がけた縫製工場に発注したものだ。倉橋さんは旧ヴァンヂャケットOB。アイビーにこだわった商品を提供し、全国から振り出し物を求める客が訪れる。

ブレザーの語源は、英国のケンブリッジ大学とオックスフォード大学の対抗ボートレースで、赤いジャケ

VAN(ヴァンヂャケット) 石津謙介氏が1951年に設立し、アイビーファッションを日本に広めた。3文字のロゴと「for the young and the young-at-heart」のキャッチコピーが60-70年代に全国を席巻。「Kent」などのブランドも展開し、ファッションだけでなくライフスタイルを提案した。78年に倒産したが、80年に社員が新会社を設立し、再建を果たした。

3つボタン段取りのアイビー、トラッドの代表的な形となった。ジャケットの後ろの切っ込みは上部がゆるい形になったセンターファックドベントがアイビーらしい。

ローファー アイビーの代表的なヒモなし靴。コンビのサドルシューズ、バックスキンに赤いソールのゲーティバックスも定番で、アイビーの進化系とも言えるブレッビー(1980年前後に流行)ではデキシューズが人気だった。



## ブームの予感

ネットが水面(みなも)に燃える(ブレイズ)ように映ったというのがある。この説に従えばブレザーの色は「赤」が正統だ。

Kさんも「のすたる爺(じい)さん」の名前で交流するメンバーだったが、赤いブレザーに袖を通すことなく、昨年この世を去った。東京マラソン当日のお披露目会は、「メンズクラブ」(アッシュト編入画報社)の人気企画「街のアイビーリーガース」から飛び出したようなコマだった。数日後、ネームが入ったブレザーは鈴木さんから、Kさんの墓前に届けられた。

## 基本しっかり吸収

最近、男性ファッション誌で「アイビー風」の着こなしやアイテムが「メンズクラブ」は昨年8月号で、1965年初版の写真集「TAKE I V Y」に関する特集を組んだ。TAKE I V Yはまだ米国が遠い存在だった時代に、東部のアイビーリーグ8大

学でロケを敢行。ボタンダウンを自然に着こなす学生の日常を写し、当時のアイビーファンがこぞて手にした伝説の写真集だ。アイビーの昔と今を紹介した特集号は反響呼び、昨年12月には完全複製版が限定発売された。

ヴァンヂャケットの直営店「VANウエアハウス日の出」(東京・港)の赤坂悦店長(56)は中年アイビーリーガースを「カラーコーディネートが上手」と評する。メンズクラブや、メンズショップの店員からアイビーの基本を吸収したのが土台にあるからだという。VANの創業者、石津謙介氏は「TPO」という言葉で、いつ、どこで、何を着たら良いかを教えてくれた。

当時のアイビーファンは友人同士で「アイビークラブ」を作り、音楽やスポーツを楽しんだ。時代を超えたクラブは、ネットを媒介に活動範囲を一気に広げた。八重洲通りを歩きながら、メンバーの一人は「僕らはボタンダウンを通してアメリカを疑似体験し、そして夢見た。今度は赤いブレザーを着て、松坂が咲けるレッドソックスの応援に行きたい」と、少年のように語った。

(白鳥和生)

往年のファッション再び夢中

# MJ

Nikkei Marketing Journal

日経流通新聞

3月2日(金曜日)

月/水/金 発行

発行所 日本経済新聞社  
東京本社 〒100-8066 東京都千代田区大手町1-9-5  
電話(代表) 03(3)3270-0251  
大阪本社 〒540-8588 大阪市中央区大手前1-1-1  
電話(代表) 06(6)6943-7111  
NIKKEI NET PLUS http://www.nikkei.co.jp/  
NIKKEI MJサイト http://www.nikkei.co.jp/mj/  
MJメールマガジン http://www.nikkei4946.com/e-service/  
購読の申し込み先 03(3)321-4145  
http://www.nikkei4946.com

## INDEX

心はアイビー少年



60-70年代に青春を送った中高年男性が再びアイビーファッションに身を包み、街に繰り出し始めた。選物を前に赤いブレザーを仕立てる彼らの実態とは